

「金魚と美しい嘘のはなし。」

白夜のある国にいます。

残念ながら今は冬なので地平線をうろつく太陽は見れませんが、素敵な所です。

手紙とチョコレートをありがとう。貴方が元気そうでほっとしました。

今泊まっているクラシックなホテルの最上階（屋根裏部屋）がおそろしく寒いので、毎日美術館を巡ったり、図書館にこもったりしながら、春を待ちわびています。

声をひそめ、魚のように静かな場所にばかりいると、無性におしゃべりがしたくなります。だから、貴方に手紙を書くことにしました。

今日、市場でヒヤシンスを買いました。

売り子は10歳にもならない女の子。雑踏の中、色褪せた赤いフードをかぶり、大きなかごをさげている姿が「赤ずきんちゃん」そっくりだったので、目に留まったのです。

かごの中には、冬のイチゴや薬草なんかと一緒に、しおれかけた野生の花々が、束になって並んでいました。彼女の小さな手や頬が泥で汚れていたのから察するに、今朝の市場のために自分で摘んできたものだったのでしょうか。

客を集めるためか、フードを揺らす北風の冷たさを忘れるためか、少女はあどけない声でこんな歌を歌っていました、

「Here comes the sun・・・ Here comes the sun・・・」

赤ずきんちゃんが歌う、調子はずれのビートルズ。太陽の沈まない時間をもつこの国に、なんてふさわしい歌でしょう。

人々はにっこり笑って、銅貨と引き換えに、彼女のかごの中のものを買っていきます。

私も、売れ残りの花の中から、ピンク色のヒヤシンスを選びました。顔を寄せると、小さな星の集まりのような花から、甘苦い春の香りが胸いっぱいひろがりました。

「この花はね、きっと、空から落ちた星が生まれ変わったのよ」

私が片言の言葉と身ぶりでそう伝えと、少女の瞳にぱっと灯りがともりました。

きっと美しいお話だと思ったのでしょうか。

美しいお話。そして、美しい嘘だと。

私が生まれて最初にもらった、美しい嘘の話をしましよう。

それは、私が枇杷の木のある家に住んでいた時のこと。

ある日、なんの前触れもなく、父が金魚をもらってきたことがありました。

それも、どっさりと。姿かたちの違うのが、20匹はいたでしょうか。

遠くに引越す友人からゆずられたのだと、大きな水槽を抱え、父は困り顔で私達に告げました。

もちろん、母と私は大喜び。家のあちこちから花瓶や鉢や、拳句の果てにはティーポッ

トまで引っ張り出してきて、「金魚のおひっこし」に興じたのを覚えています。

赤いりんごのように丸くて愛らしい和金。黒い巨大な出目金。ほっぺに透明な袋を揺らした水泡眼・・・。

部屋のあちこちに並べられた「とりあえずの水槽」に囲まれて食べたその日の夕食の奇妙なことといったら！みんな、笑いがとまりませんでした。

母と私のお気に入り、全体が真っ白で口のまわりだけが赤い、尾ひれの長い金魚でした。ワルツでも踊るような優雅な泳ぎを見て「花嫁さん」という名前をつけたのは、確か私でした。

ガラスの鉢ごしに、私は金魚と見つめ合う。すると金魚は水の国から、なにやら私に語りかけてくるのです。ぱくぱくと、声にならぬ言葉を、まるい泡粒にのせて。真珠のように連なり、零れる泡に耳を澄ませど、言葉は決して聞こえません。

「それでもいつか、秘密の言葉がわかるかも知れない」

こうして赤い唇の白い金魚とにらめっこするのが、私のささやかな日課となりました。

そして、ひと月ほどたった頃。

朝目覚め、いつものように水槽に向かった私が見たのは、白い腹を上にもむけてぶかぶか浮かんでいる、「花嫁さん」でした。力なく、白いぬげがらのようになって。言葉の秘密を明かさないうまま、死んでしまったのです。

「可哀想なお魚は、天国に送ってあげましょうね」

亡骸とスコップを手に、母は私を枇杷の木の下に連れて行きました。

霜柱がもろもろと崩れる地面にスコップを当てる時のじゃりっという音。

冬の匂い。悼むように、雲間からさしていた光。そして、聖母マリアのような、祈るような母の白い横顔をよく覚えています。

冷たい土のベッドに金魚を横たえ、できるだけそっと土かけ。

考えたあげく、墓印は、宝物の赤いビー玉にしました。

「さあ、天国にいったおいで」

涙にふさがれた私の眼に、ぼんやりした赤色がゆらゆら揺れては、流れ落ちてゆきました。

その、次の日。

私はスコップを手に、勇ましく金魚のお墓へと向かいました。もちろん、死んだ金魚が無事天国に行ったのか、確かめるためです。笑えるでしょう？

でも、まだ柔らかいままの土を掘り返し、その先に私が見たもの、貴方は何と思う？

それは、透きとおった小さなガラスの星でした。

魚が星になるなんて！私は驚いて、庭仕事をしている母のところへ走りました。

お日様の子どもようなレモンを摘み取りながら、母は涼しい顔で言いました。
「そうよ、死んだら最後、なんでもみんな星になるのよ。今夜あたり空に帰っていくでしょうから、そっとしておいてあげなさい」

これが、物語の好きな母の作り話だと知ったのは、それから20年もたってからのことでした。

私の性格を知り尽くした母は、天国に行けない金魚を見て私が泣き出さないようにと、亡骸を裏庭の椿の下へこっそり埋めかえていたのです。

この話を聞いたとき、私は柔らかなブランケットに、そっと包まれたような気がしました。それは子どもの頃の匂いそのもの、私を世の中の恐ろしいものから庇護してくれていたものの肌触りでした。

そしてこれが、私がもらった、最初の美しい嘘でした。美しい嘘、美しい物語。

こんな物語を、私も貴方にあげたかった。

本当のことだけが最善ではないということを、私はあの時に知ったはずだったのに。

言葉は空回りしてしまって、私はたぶん、ひとりで水槽の金魚のようになって、ぱくぱくと、言葉にならぬ泡ばかり吐いていたような気がします。

家を出る前の夜、私は貴方がくれた金魚を見ていました。

金魚も、透明な泡を吐きながら、私を見つめていました。

貴方の優しさで水のようにいっぱいになってしまって、私はもう、何も話せないような、どこへも行けないような気がしていました。

もう、この部屋にはいられない。外へ出なくては。言葉をとりもどさなくては。

そして、私は旅に出てしまいました。

でも不思議なことに、こうして遠くにいることで、貴方のことがだんだんにわかってくるようなのです。それから、自分のことも。

だからもう少し旅をつづけることを、許してください。

チョコレートのお返しに、ではないけれど、貴方にぴったりの空色のマフラーを編んだので、送ります。

毎日行く美術館でちょっとしたアルバイトをしていたのですが、暇な時間に編み物を覚えたのです。気に入るといいけれど。

それでは、また。貴方と金魚たちがすこやかであるよう、祈っています。